

学校教育におけるコロナ禍への 対応の成果と課題

滋賀県教育委員会事務局
教育総務課
高校教育課
幼小中教育課
特別支援教育課

小中学校の状況①

学習面について

コロナ禍で実施した対応	成果・課題
<ul style="list-style-type: none"> ・ 臨時休業時等の同時双方向型オンライン授業 ・ 臨時休業時、GIGAスクール端末に学習課題等を配信し自宅学習 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 非常時でも、学校と児童生徒がつながりを持ち、学びを継続させることができた。 ・ 児童生徒の反応が分かりづらく、理解の状況も様々であるため、登校してから再度授業を行うこともあった。 ・ 教員の説明だけでなく、グループ分けの機能を活用して子ども同士の意見交換の場を設定するなど、オンライン授業をさらに充実させる工夫、改善が必要である。

生徒指導について

コロナ禍以前の対応	コロナ禍で実施した対応	成果・課題
<ul style="list-style-type: none"> ・ SCやSSWとの相談は基本的に学校で行い、必要に応じて家庭訪問も可能としていた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ SCやSSWが出勤できない場合、電話等での相談も可能とし、ケース会議や教職員研修を行った。 ・ 学校再開後は、SC・SSWの配置時間を拡充した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 関係者で児童生徒に対するアセスメントを多く行うことができた。 ・ 電話等では、相談者の様子が見えないなどの課題があり、オンラインでの対応の必要性も見えた。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 学校が虐待を発見しやすい場として、虐待の疑いがある場合は福祉部局へ相談や通告を行っていた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 被虐待児童等の特に配慮を要する児童生徒について、定期的な情報把握（1週間に1回以上）を行った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ コロナ禍で家庭で過ごす児童生徒に対する虐待事案が学校再開後増加し、虐待の早期発見に学校の果たす役割の大きさが分かった。

学校行事について 【 コロナ禍対応型の儀式的行事（卒業式・入学式・修学旅行） 】

コロナ禍以前の対応	コロナ禍で実施した対応	成果・課題
<ul style="list-style-type: none"> ・ 卒業生もしくは新入生と、全校児童、保護者、来賓が参加、呼びかけや歌などで祝う ・ 教室で担任との出会いや別れの時間をとる ・ 県外への泊を伴う修学旅行 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 体育館には卒業生もしくは新入生と保護者のみが参加、在校生は、教室でオンライン参加する ・ 学級での時間を可能な限り削る ・ 観光部局と連携し広報、県内への修学旅行増加 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 儀式的意義を見つめ直し簡素化し実施できた ・ 在校生や担任と心を通じ合わせる機会の工夫が必要 ・ 県内旅行先での魅力の再発見

小中学校の状況②

学校行事 事例【しが生徒会オンライン交流会の実施】

コロナ禍以前の対応

- ・各校で生徒会活動
- ・市町で交流会を実施した事例あり



東近江市での生徒会交流会(R2)

コロナ禍で実施した対応

- ・オンラインで学校や教育委員会をつなぐ
- ・県内中学校生徒会を対象に企画
- ・**高校生徒会・大学教授**をアドバイザーとして招聘



成果・課題

【成果】

- ・生徒会活動の**意義・効果**を再確認。
- ・実践交流により、**自校のよさ**に気づく。**活性化のヒント**を得る。
- ・**ICTの積極的な活用**が進む。
- ・県内98中学校のうち25校が参加。

【課題】

- ・次年度の取組方針や効果的な手立てについて考える必要がある。

事例【スクールステイ体験(東近江市立能登川東小学校)】

奈良県等へ 修学旅行

- ・児童・保護者から修学旅行実施の強い要望
- ・児童が意見を出し合い「**コロナ禍における避難所**」を想定→体験を通して学ぶ**校内宿泊体験**の実現
- ・保護者・**能登川地区まちづくり協議会**の協力



【成果】

- ・「遠足・集団宿泊的行事」の**意義を見つめ直し**、新たな実施方法を示した。
- ・R3は、宿泊なしで防災教育として位置付く。

【課題】

- ・コロナ禍の実践は、一過性のものとなる傾向。コロナ禍前後の実践を総括し、何を選択し何を省くかを検討する必要あり。働き方改革の視点も併せて必要。³

県立高等学校の状況①

学習面について

コロナ禍以前の対応	コロナ禍で実施した対応	成果・課題
<ul style="list-style-type: none"> ・ 臨時休業等により、一定期間登校できない生徒への学びの保障を十分に想定していなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ オンライン・動画による授業 ・ メールやTeams等による生徒・保護者への連絡（携帯電話等） ・ 授業におけるICTの活用推進（Teams、Google Forms等） <p>*BYODによる1人1台端末の導入は令和4年度</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ ICTの活用も含め、学びの保障ができる体制を確立できた。 ・ 生徒・保護者との双方向の連絡手段ができた。 ・ ICTの効果的活用によるさらなる授業改善

学校行事について

コロナ禍以前の対応	コロナ禍で実施した対応	成果・課題
<ul style="list-style-type: none"> ・ 学校行事ができない場合は中止とすることが多かった。 ・ 行事内容の精査や工夫に余地があった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ コロナ対応の中でできる取組を生徒が主導で提案（学園祭等） 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学校行事等において新たな取組がなされた。 ・ 生徒の自主性・主体性が育まれた。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 海外修学旅行、海外実習を実施していた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ オンラインによる海外交流（修学旅行訪問予定先との交流を含む） ・ 国内における英語研修 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ICT活用など、新しい形での交流ができた。一方、実際に海外で経験することなど、リアルな体験の意義も再確認できた。

コロナ禍における取組について

コロナ禍以前の対応	コロナ禍で実施した対応	成果・課題
<ul style="list-style-type: none"> ・ 地域清掃やボランティアなどの社会貢献活動に取り組んでいた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ コロナ禍での新たな取組や工夫を模索・企画 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 高校生によるコロナ禍における社会貢献の取組ができた。

県立高等学校の状況②

県立高等学校の事例

オンラインを活用した取組



バングラディッシュやインドネシアの高校生との交流



滋賀、三重、大阪の高等学校3校によるリモートリアルタイムバンド演奏（近畿高等学校総合文化祭）

社会へ貢献する取組



工業高校における感染予防対策器具の制作



地域応援メッセージを書いた書道部による懸垂幕

新しい生活様式で今を乗り越えよう

一人の笑顔で広がる笑顔 つながりを大切に

県立特別支援学校の状況

学習面について

コロナ禍以前の対応	コロナ禍で実施した対応	成果・課題
<ul style="list-style-type: none"> 聞き取りやすい発声や口の動き、表情を交えたコミュニケーション指導。 	<ul style="list-style-type: none"> 学校によっては、マスク着用からフェイスシールドやマウスシールドの使用に変えて対応。 	<ul style="list-style-type: none"> 言語獲得や音声情報の読み取りには、聴覚情報だけでなく、相手の発話に伴う口の形や表情等の視覚情報が重要な役割を果たしていることを再確認。 マスク着用時のはっきりとした発声を意識した会話。

学校行事について

コロナ禍以前の対応	コロナ禍で実施した対応	成果・課題
<ul style="list-style-type: none"> 集会などの行事は、集合参加型で実施。 交流学习（学校間交流、居住地校交流）は、直接的な交流に取り組むことが多かった。 	<ul style="list-style-type: none"> オンライン会議システムを用いて実施。 	<ul style="list-style-type: none"> 注目箇所の焦点化や、拡大表示など、児童生徒が画面に注目するよう工夫して取り組んだ。ICT機器の活用により指導方法の幅に広がりを持たせることができた。 ICT機器を活用した教育方法や人材育成が課題。 交流学习については、相手校との事前・事後学習の丁寧なやりとりが一層必要。

スクールバスの運行、要医療的ケア児への対応について

コロナ禍以前の対応	コロナ禍で実施した対応	成果・課題
<ul style="list-style-type: none"> スクールバスの安全な運行。 	<ul style="list-style-type: none"> 車内での三密回避、感染リスク低減のためのバス増車、感染症対策（換気や消毒）。 	<ul style="list-style-type: none"> バスの運行にあたっては、感染症対策を始め、増便バスや運行方法の工夫など、過密乗車とならない取組が引き続き求められる。
<ul style="list-style-type: none"> 要医療的ケア児等、重症化リスクの高い児童生徒に対する感染予防を講じた活動。 	<ul style="list-style-type: none"> 学習プリントや授業DVDの配布、ZOOMによるオンライン学習。 	<ul style="list-style-type: none"> 学習機会の保障のために、学習指導継続の取組（ICT機器の活用など）の推進が必要である。 感染拡大における看護師確保の問題。